

日本聖公会祈祷書

聖餐式の言葉から



司祭 ヨハネ 井田 泉

目 次

1. 主イエス・キリストよ、おいでください	4
2. キリエ・エレイソン	6
3. いと高きところには神に栄光	8
4. 祈りましょう <特祷>	10
5. 聖書のみ言葉を聞きましょう	12
6. わたしたちは信じます <ニケヤ信経>	14
7. 全公会のため、また世界のために祈りましょう <代祷>	16
8. とともに罪を懺悔しましょう <懺悔>	18
9. 主の平和が皆さんとともに <平和の挨拶>	20
10. 供え物を献げましょう <奉献>	22
11. 心を神に <感謝聖別 ①>	24
12. 聖なるかな <感謝聖別 ②>	26
13. このパンとぶどう酒を祝し、聖として <感謝聖別 ③>	28
14. これはあなたがたのために与えるわたしの体です <感謝聖別 ④>	30
15. 天におられるわたしたちの父よ <主の祈り>	32

16. 世の罪を除く神の小羊よ <アニユス・デイ>34
17. あなたのために与えられた主イエス・キリストの体
 <陪餐>36
18. 神の恵みが、常に皆さんとともにありますように
 <感謝・祝福・派遣>38

1. 主イエス・キリストよ、おいでください

<参入>

聖餐式の本文は、司祭が「主イエス・キリストよ、おいでください」と、主イエスを呼び求めることから始まります。

イエス・キリストが来てくださらなければ礼拝は無意味です。

主イエス・キリストと出会い、この方と交流する（この方の命をいただく）ことが礼拝の意味であり目的です。

実は、主イエスのご自分のほうからわたしたちを待っていてくださるのですが、わたしたちがこの方を呼ぶときに、喜ばしい出会いが起こります。

司祭の祈りに重ねて、会衆は「弟子たちの中に立ち、復活のみ姿を現されたように、わたしたちのうちにもお臨みください」と祈ります。イエス・キリストの臨在こそ、礼拝の根本です（ルカ 24:36、ヨハネ 20:19）。

最初の主の弟子たちに起こったこと——復活のイエスの顕現が、今、この礼拝で起こってほしいのです。

礼拝の始まる前に、主イエスの臨在を求めて心から静かに祈り、そして礼拝の冒頭でイエスを切に呼び求めるとき、イエスはここにおいでくださって聖餐式は命あるものとなります。

主は、わたしたちに出会って喜ぼうとして待っておられます。

（もし礼拝に遅刻する場合でも、礼拝堂に到着するまで「主イエス・キリストよ、おいでください」と祈っていきましょう。）

2. キリエ・エレイソン

(主よ、憐れみをお与えください)

キリエ・エレイソン（主よ、憐れみをお与えください）はギリシア語です。

キュリエ エレーソン
κύριε, ἐλέησόν

新約聖書は、当時の地中海世界共通語であるギリシア語で書かれました。そこに含まれるギリシア語の祈り求めの言葉が、わたしたちの聖餐式にまで継承されてきたのです。

キリエ エレーイソン
「主よ、息子を憐れんでください」

イエスにこう訴えたのは、発作の病に苦しむ息子をかかえた父親でした（マタイ17:15）。やがてその子は癒やされました。

またエリコの盲人バルティマイは、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫んでイエスを呼び止め、見えるようにされてイエスに従いました（マルコ 10:46-52）。

聖餐式の中で、わたしたちも自分の困難や願い、人の困難や願いを携えて、**キリエ・エレイソン（主よ、憐れみをお与えください）**と主に切に祈り求めましょう。

主は憐れみ深い方であって、祈り求めるわたしたちをけっして無視されません。

主イエスの姿と 생각이浮かび上がってきます。

「イエスは、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。」 マタイ 9:36

3. いと高きところには神に栄光

大栄光の歌

いと高きところには神に栄光、地にはみ心にかなう人びとに平和がありますように。

全能の父、天の王、主なる神よ、主を拝み、主に感謝し、主の栄光をほめたたえます。

父の独り子、主イエス・キリスト、世の罪を除く神の小羊、主なる神よ、わたしたちに憐れみをお与えください。

父の右に座しておられる主よ、わたしたちの祈りを受け入れてください。

イエス・キリストよ、主のみ聖、主のみ王、主のみ聖霊とともに、父なる神の栄光のうちに、最も高くおられます

アーメン

この「大栄光の歌」の冒頭は、救い主がお生まれになった夜の天使の合唱、天の大軍の賛美そのものです（ルカ 2:14）。

静寂のベツレヘムの野原に、突然響きわたる喜びの歌声。わたしたちは、「大栄光の歌」を歌いあるいは唱えるとき、あの天使の合唱に加わるのです。何と喜ばしいことでしょうか。

神に栄光を帰し、地に平和の実現を祈ったその次に、わたしたちは**父なる神**を拝み、感謝と賛美をささげます。

その後、わたしたちの眼差しは**主イエス・キリスト**に向かいます。

「**父の独り子**」「**世の罪を除く神の小羊**」「**父の右に座しておられる主**」と、主の降誕、十字架、昇天を思いつつ、憐れみを祈り求めます。

そして「大栄光の歌」はあらためてイエス・キリストを「**主のみ聖、……父なる神の栄光のうちに、最も高くおられますアーメン**」と賛美して閉じられます。

「**主のみ聖霊とともに**」と、**聖霊**への言及があって、父と子と聖霊の三位一体がこの歌にもこめられていることに気づきます。

狭い自分から抜け出て、天使たちと一緒に神を賛美する。信仰の深呼吸が起こります。

天使の合唱を聞いた羊飼いたちが、急いでベツレヘムに幼子を探しに出かけたように、わたしたちも聖餐式を続けながら救い主を求め、その方との生きた出会いに近づいていきます。

4. 祈りましょう <特祷>

聖餐式の「参入」部分の結びは**特祷**です。「み言葉」の前に置かれています。

特祷本文の前に、司式者の「呼びかけ」と会衆の「応答」があります。

司祭 主は皆さんとともに

会衆 また、あなたとともに

この「呼びかけ」と「応答」は、福音書朗読の前後、平和の挨拶、感謝聖別の冒頭、最後の祝福と派遣にもあります。これによって司式者と会衆は互いに呼び交わして思いを一つにし、祈りを深めます。

この「呼びかけ」と「応答」を大切にしましょう。司祭がはっきりと会衆に呼びかけ、会衆が司祭にしっかりと応答することによって、礼拝は生き生きしたものになります。

特祷の際、会衆の応答を受けて司祭は言います。

司祭 祈りましょう

特祷は英語では **collect** です。会衆一人ひとりの祈りが集められてくっけりした形をなしたものの、という意味があるようです。

特祷は大きく言えば三つの部分からなります。

1. 神への呼びかけ
2. 祈りの内容
3. 執り成し（主イエス・キリストによって）

特祷は司式者が祈りますが、その祈りは会衆全体の祈りです。一緒に唱える「**アーメン**」によってそれをあらわします。

特祷の表現は一般的なものですが、その中にわたしたち一人ひとりの、また教会共同体の思いを深く込めて祈るとき、神からの導きと力が与えられます。

5. 聖書のみ言葉を聞きましょう

特祷の後、わたしたちは**聖書のみ言葉**に耳を傾けます。

旧約聖書：イエス・キリスト以前に、古代イスラエルの歴史の中で生まれた文書です。律法（モーセ五書）、歴史、預言、知恵と詩歌などが含まれます。それ自体が非常に豊かな世界です。

旧約聖書は全体として、また具体的ないくつかの箇所が、やがて来るべき救い主を待望し、指し示しています。

旧約聖書に触れることによって、新約聖書の語る意味がより明確になってきます。新約聖書は旧約聖書を土台あるいは背景として書かれたからです。

詩編：古代イスラエルの人びとが礼拝の中で用いた祈りの詩集です。ゆっくりと、心に汲み取るように、また祈りを重ねていくように交唱できればと思います。

詩編が自分の祈りとなっていくことは、信仰の成長のしるしです。

使徒書：新約聖書の福音書以外（使徒言行録、書簡、ヨハネの黙示録）からの朗読です。ここには信徒への教え、慰め、促しがあります。また使徒書には、キリスト教の根幹を伝えるメッセージが多く含まれています。

福音書：主イエスの言葉と行動に耳を傾けます。イエスが今、ここにおられることを意識するために、わたしたちは立って福音書の方を向きます。

聖書のみ言葉はわたしたちを養い、支え、導きます。

聖書を聞く（読む）ことは言わば＜吸う息＞、祈ることは＜吐く息＞です。この両方を大切にすることによって、わたしたちは深く呼吸をしながら、信仰を深めていくことができます。

6. わたしたちは信じます <ニケヤ信経>

聖書の朗読と説教の後、わたしたちは**ニケヤ信経**を唱えます。これは、み言葉（神のわたしたちに対する語りかけ）に対する、わたしたちの側からの応答です。

ニケヤ信経（信条）は、使徒信経とともに、神への信仰告白が結晶したものです。これはキリスト教の信仰内容のエッセンスであって、キリスト教は何を信じているのかと言えば、まさにこの信経の内容です。

「ニケヤ」は地名です（現在のトルコ北西部）。この信経は4世紀のニケヤ公会議で定められ、その後の修正を経て5世紀に現在の形になったとされます。

「わたしたちは～を信じます」が全体を包みます。わたしたちは信仰によって生きるのですが、より正確に言えば、わたしたちに信仰を与えてくださる方（神）によって生かされて生きるのです。「～を」＝信仰の対象（神）が大切です。

信経には**三つの項目**が含まれます。

第1項は「父なる神」。造り主です。

第2項は「子なる神」。イエス・キリスト、救い主です。

第3項は「聖霊なる神」。命の与え主です。

信経によってわたしたちは、「父と子と聖霊なる三位一体の神」への信仰を告白します。

わたしたちは礼拝でこの信経を唱えるとき、誰に対して信仰を告白するのでしょうか。それは（1）**神に対して**です。そしてさらに（2）**自分に対して**、また（3）**世界に向かって**告白します。

ニケヤ信経は、全世界の主要な教会に受け入れられています。これを唱えて神を賛美することをおして、わたしたちは全世界の教会とつながるのです。

わたしたちがこれを声と心を合わせて唱えるとき、信仰の一体感が生まれます。

ニケヤ信経の1句1句に、神の愛と救いの働きが表現されています。これを丁寧に心をこめて唱えるとき、わたしたちの信仰は新しくされます。

7. 全公会のため、また世界のために祈りましょう ＜代祷＞

代祷（Intercession 執り成し）とは、他者のために祈ることです。これは教会が、またわたしたち一人ひとりが特に大切にしたいことです。

冒頭に「救い主イエス・キリストのみ言葉とみ業に頼り」と言うのですが、それは何を指すのでしょうか。

主イエスは直弟子たちのためにも、後の弟子たちであるわたしたちのためにも「彼らを守ってください」（ヨハネ17:11）と祈ってくださいました。また「勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」（ヨハネ16:33）と励ましてくださいました。このイエスの祈りと励ましに頼り、それに支えられてわたしたちは祈るのです。

代祷には次のような項目が含まれます。

- 教会と聖職・信徒 「主の真理と愛のうちに一致」
- すべての国の人々 「正義と平和の道」
- 家族、友人、隣り人 「互いに愛する」

○困難を抱えた人びと 「勇気と希望」

○世を去った人びと 「ともにみ国の栄光に」

代祷項目を挙げるとき、一つひとつを大切に心にとめて、その人びと、その事柄を神さまの前に差し出すようにします。神がご自分の目を開いて見て、ご自分の耳で聞いて心にとめてくださるように、と差し出すのです。

「この方（イエス）は常に生きていて、人々のために執り成しておられる」（ヘブライ 7:25）

この大きな祭司イエス・キリストのもとで、わたしたちは小さな祭司となって、他者のために祈ります。イエスがそれを聞いておられ、一緒に祈ってくださるので、その祈りは空しくありません。

8. とともに罪を懺悔しましょう <懺悔>

代祷に続くのは懺悔^{さんげ}、罪の告白です。

ここまで、神の言葉に耳を傾け、またそれに対する応答として信仰告白（信経）と、教会と世界のための祈り（代祷）を神に献げました。これにより神とわたしたちの間には、今、新しく命の交流が起こっています。

ここで神とわたし（たち）の間に立ちほだかっているかもしれない壁が取り除かれ、神に対するわたしたちの負い目が解消される時が用意されています。それが懺悔です。

わたしたちは人間である以上、神と人に対して過ちを犯し、その負い目を抱えるものです。それを神の前に懺悔、告白するとき、神の赦^{ゆる}しが臨み、わたしたちは清められ、軽くされ、新しくされます。

「わたしたちは、思いと、言葉と、行いによって、多くの罪を犯していることを懺悔します。」

式文の表現は一般的なものですが、事前に具体的な自分の過ちやわだかまりを心の中で明確にしておき、それをこの一般的な表現の中にこめるなら、わたしたちの懺悔は確実に神に届くでしょう。

司祭（主教臨席のときは主教）は会衆の願いに応えて、会衆のために神に赦しを願う「執り成しの祈り」を献げます。

わたしたちの懺悔が真心からのものであって、司祭の執り成しの祈りとともに聖霊が働くなら、そこに神の赦しが現実に起こります。神の赦しの愛がわたしたちを清め、命を吹き込み、わたしたちは新しくされるのです。

こうしてわたしたちは、主の尊い聖餐を受けるにふさわしく整えられます。

9. 主の平和が皆さんとともに <平和の挨拶>

懺悔^{さんげ}の後、聖餐式の第2部<聖餐>の部に入ります。

その冒頭が平和の挨拶^{あいさつ}です。

司祭 主の平和が皆さんとともに

会衆 また、あなたとともに

司祭 平和の挨拶を交わしましょう

ここでルブリック（式文中、小さい字で書かれた指示・説明）にあるとおり、互いに「主の平和」と唱えて挨拶を交わします。

この平和の挨拶は、主イエスの言葉に起源があります。

イエスは十二弟子を派遣するにあたってこう言われました。

「その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。
家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願
う平和は彼らに与えられる。」マタイ 10:12-13

復活したイエスは、おびえている弟子たちのところに来て、
その真ん中に立って言われました。

「あなたがたに平和があるように」 ヨハネ 20:19、21、26

主の平和と喜びが弟子たちの間に満ちました。

主イエスの平和の呼びかけを受けて、わたしたちもその平和を互いに呼びかけ、分かち合い、祈り合います。復活の主がその場を平和と祝福をもって満たしてくださいます。

パウロはその手紙の冒頭でこう祈りました。

「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」 ローマ 1:7 ほか

わたしたちはお互いの間で平和を呼びかけ祈り合うとともに、主イエスが願われたこの世界の平和を求めて歩んでいきます。

「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」 マタイ 5:9

10. 供え物を献げましょう <奉献>

平和の挨拶に続いて奉献に移ります。

ここでわたしたちは、＜ともにあずかる主の食卓＞の準備をします。

主イエスは弟子たちと最後の食事を共にする前、その準備を二人の弟子たち（ルカ福音書ではペテロとヨハネ）にゆだねられました。二人は言われたとおり食事の準備をしました（マルコ 14:16）。

ここでわたしたちがパンとぶどう酒（と献金〔信施〕）を用意して聖卓に献げるのは、聖なる食卓の大切な準備です。

わたしたちが献げるパンとぶどう酒には、

- （1）神が創造された大地の恵み
- （2）わたしたちの労働・労苦の実り

という意味がこめられています。

わたしたちの生活の営みから生まれたものを献げることをとおして、わたしたち自身を神の前に持って行き、自分を神にゆだねるのです。

司祭 全能の父なる神よ、この「信施」供え物を受け、主のみ業のために用いてください

ここでいう「主のみ業」とは何でしょうか。

第一には、今ここで起ころうとしていること——主がパンとぶどう酒をご自身の命としてくださり、それをわたしたちと与えてくださること——です。

第二には、わたしたちの供え物とおして、教会の生命が保たれ養われ、また外への働きが広がっていくことです。

会衆 すべてのものは主の賜物。わたしたちは主から受けて主に献げたのです アーメン

この言葉は旧約聖書・歴代誌上 29:14 からの引用で、ダビデ王の祈りの言葉です。

これは、将来の主の神殿の建築のために、ダビデ王と多くの人々が献げ物をして神を賛美し、ともに喜んだ場面です。

わたしたちの所有するものはすべて主からいただいたもの。今その一部を、自分自身を献げる思いをもって主に献げます。それは主との生きた交流を味わう喜びの場面です。

11. 心を神に <感謝聖別 ①>

いよいよ**感謝聖別**の祈りに入ります。その冒頭は、司式者と会衆の間に交わされる 3 重の対話句（呼びかけ－応答）です。

司祭 主は皆さんとともに

会衆 また、あなたとともに

司祭 心を神に

会衆 主に心を献げます

司祭 主なる神に感謝しましょう

会衆 感謝と賛美はわたしたちの務めです

司祭の呼びかけ「心を神に」はラテン語の *sursum corda*（スルスム コルダ＝上に！ 心を）の訳です。ここで心をまっすぐ神に上げるのです。

「スルスム コルダ」と呼ばれるこの対話句は、3 世紀の礼拝にさかのぼると言われます。

司祭 主なる神に感謝しましょう

会衆 感謝と賛美はわたしたちの務めです

司式者の呼びかけに会衆は賛同して応答し、一緒に**神への感謝と賛美**を新たにします。

聖餐式文には「呼びかけ－応答」が何度か出て来ますが、ここはそれが **3 回重ねられる**ことによって、司式者と会衆の心が一つになって高まります。そのことを大切にしましょう。

ここでわたしたちの思いは神に向けて高まり、またより深まって、後に続く感謝聖別の祈りへと導き入れられます。

こうして、これから司式者の祈りによって表現されていく神の救いの業を心に留め、主イエスの聖餐制定の言葉に耳を傾け、父・子・聖霊の三位一体の神の救いを賛美しつつ、イエス・キリストの臨在に触れていきます。

12. 聖なるかな <感謝聖別 ②>

「心を神に」の 3 重の対話句（呼びかけ―応答）に続いて、司式司祭は感謝聖別の祈りを唱えます。

その内容は――神による天地創造、人間の創造、神の子の受肉降誕、十字架の死と復活による救い、聖霊の注ぎ……。神の救いの業を一つひとつ思い起こして心に刻むのです。

それに続いて次の言葉を一同で歌いまたは唱えます。

**聖なるかな、聖なる神、聖なるかな、万軍の神
主の栄光は天地に満つ**

これは旧約聖書・イザヤ書第 6 章 3 節にもとづきます。
紀元前 8 世紀、青年イザヤはエルサレムの神殿で祈っていました。そのとき、予想もしない神の臨在に接しました。

「わたしは、高く天にある御座^{みざ}に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっぱい広がっていた。」 6:1

翼を持った天使セラフィムが、飛び交いつつ、互いに呼び交わして歌います。

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。

主の栄光は、地をすべて覆う。」6:3

聖なる神の前にイザヤは自分の汚れを痛切に感じ、自分は死ぬと思いました。そのとき、セラフィムの一人が、神の祭壇から燃える炭火を持って来て、イザヤの唇に押し当てました。これによって彼は、神の赦しと清めを受け、預言者として遣わされることになったのです。

ほめたたえよ、主のみ名によってこられる方を
いと高きところにホサナ

これは、エルサレムに入城されるイエスを、群衆が歓呼して迎え、叫んだ言葉で（マルコ11:9-10）、旧約聖書・詩編118:25-26によっています。「ホサナ」とはヘブライ語で「どうか今、お救いください」という意味です。

聖餐式が進んで深まっていくこの時、わたしたちを赦し清めてくださる神の臨在を知り、主イエスを喜び迎えましょう。

13. このパンとぶどう酒を祝し、聖として ＜感謝聖別 ③＞

司式者が唱える**感謝聖別**の祈りの中で、最も重要で欠くことのできないのは次の二つです。

- (1) 聖霊を求める祈り（エピクレシス＝祈求）
- (2) 主イエスの聖餐制定の言葉（アナムネシス＝想起）

まず「**聖霊を求める祈り（エピクレシス＝祈求）**」です。

これは＜**感謝聖別 I**＞では次のようになっています。

どうかみ言葉と聖霊により、主の賜物であるこのパンとぶどう酒を祝し、聖として、わたしたちのためにみ子の尊い体と血にしてください。

神の力、また命の神ご自身の現れである**聖霊**によって初めて、わたしたちはパンをとおしてキリストの体を受け、ぶどう酒をとおしてキリストの血をいただくことになります。

これは司式者の特殊能力によるものではありません。**聖霊の働き**がそれを実現してくださるのです。

＜感謝聖別Ⅱ＞のほうは次のようです。こちらのほうが、聖霊を祈り求める趣旨がよりはっきりしています。

まことに尊い、すべての聖なるものの源である父よ、あなた
の賜物であるこのパンとぶどう酒の上に聖霊を送り、これを
わたしたちのためにみ子イエス・キリストの体と血にしてく
ださい。

声を出すのは司式者だけですが、ここでは特に会衆も、司式者とともに聖霊を求めて祈ることを大切にしましょう。

聖霊を求めて祈るわたしたちの間に（この時間と空間に）、イエス・キリストが臨在してくださり、さらにパンとぶどう酒の中にご自身の存在（愛の命）を託してくださいます。

なお「エピクレーシス」^{エピカレオー} ἐπίκλησις は ἐπικαλέω（呼び求める）というギリシア語の動詞から来ています。

「聖餐式におけるキリストの臨在」の理解に関しては種々議論がありますが、聖公会は「実体変化説」と「象徴説」の両極端を避けることとして、あとは各自の理解にまかされています。

14. これはあなたがたのために与えるわたしの体です <感謝聖別 ④>

司式者が唱える**感謝聖別**の祈りの中で、最も重要で欠くことのできないものとして、今回は**聖霊を求める祈り（エピクレシス＝祈求）**を取り上げました。

今回は二つ目の「**主イエスの聖餐制定の言葉（アナムネシス＝想起）**」です。主イエスがかつて最後の晩餐で言われた言葉を、司式者は今ここで唱えます。

主イエスは渡される夜、パンを取り、感謝してこれを裂き、弟子たちに与えて言われました。「取って食べなさい。これはあなたがたのために与えるわたしの体です。わたしを記念するため、このように行いなさい」

また食事の後、杯を取り、感謝して彼らに与えて言われました。「皆この杯から飲みなさい。これは罪の赦しを得させるようにと、あなたがたおよび多くの人のために流すわたしの新しい契約の血です。飲むたびにわたしの記念としてこのように行いなさい」

このイエスの言葉と業を、今ここでわたしたちははっきり**想起**（思い起こし）、記念します。

そのとき、ただわたしたちが想起し、記念するばかりではなく、主イエスご自身がそれを想起し、記念して、ここで働いてくださいます。最後の晩餐の再現を、実は主イエスご自身がしてくさるのです。

聖餐式は、主イエスご自身が「このように行いなさい」と命じて定められたことに従って行います。ここには、わたしたちを忘れず、わたしたちを愛しとおされるイエスの情熱と決意が込められています。

「**新しい契約**」とは、かつて神がイスラエルの民と結ばれた「**古い契約**」に対するものです。イエス・キリストが神とわたしたちの間に立って新しい契約を据え、それを保証してください。神がわたしたちを「ご自分のもの」として、命を賭けて愛してくださり、またわたしたちはこの方を「わたしたちの神」として真心をもって信じ従う。この契約はわたしたちを主のみ手のうちに保って慰め励まし、祝福で満たします。十字架はそのしるしです。

15. 天におられるわたしたちの父よ ＜主の祈り＞

感謝聖別の後、一同で「主の祈り」を唱えます。

主の祈りのあらましは次のとおりです。

1 【呼びかけ】 天におられるわたしたちの父よ、

2 【祈願】

(1) 神に関する祈願（祈り）前半 3 つ

み名（あなた＝神の名）が聖とされますように。

み国（あなたの＝神の統治）が来ますように。

みこころ（あなたの＝神の意志）が天に行われるとお
り地にも行われますように。

(2) わたしたちに関する祈願（祈り）後半 3 つ

わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。

わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人
をゆるします。

わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いくだ
さい。

3 【頌栄(賛美)】

国と力と栄光は、永遠にあなたのものです アーメン

神への呼びかけだけで、すでに祈りです。神はわたしたちの呼びかけを聞かれ、神とわたしたちの交流が始まります。

「神に関する祈り」が先、その次に「わたしたちに関する祈り」が続きます。神のことが第 1、わたしたちのことが第 2。これが信仰の秩序です。

「まず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」(マタイ 6:33) と、イエスが約束されたことを心にとめましょう。

主の祈りは、主イエスご自身が祈っておられる祈りです。イエスをご自身の祈りにわたしたちを招き入れてくださるのです。主の祈りを祈るとき、わたしたちは祈りにおいてイエスとひとつにされます。

主の祈りの中に、わたしたちの抱える大小の困難や願いをこめましょう。それをイエスはご自分のこととして、一緒に祈ってくださいます。

16. 世の罪を除く神の小羊よ ＜アニユス・デイ＞

「主の祈り」の後、陪餐の直前に「神の小羊」を歌いまたは唱えます（その前に「近づきの祈り」を用いることもあります）。

世の罪を除く神の小羊よ、憐れみをお与えください
世の罪を除く神の小羊よ、憐れみをお与えください
世の罪を除く神の小羊よ、主の平安をお与えください

これは、洗礼者ヨハネが、自分の方に近づいて来られるイエスを見て、思わず口にした言葉に基づいています。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」

（ヨハネ 1:29、また 1:36）

遠い昔、神の民の出エジプトに際して、神は、家族ごとに小羊を用意して、それを食べるとともに、その血を家の柱と鴨居に塗るように命じられました。この小羊の血のしるしは、主の審きから人々を守るものでした（出エジプト 12 章）。

イザヤ書には、苦しみを受け、屠^{ほふ}られることによって、世の罪を担い、人々を救う小羊（苦難の僕）の姿が描かれています（53:7-12）。これは来たるべき救い主の予告でもありました。

洗礼者ヨハネは、イエスを見てはっきりと悟ったのです。この方が、世とわたしたちの罪を引き受け、血を流して死に、それによってわたしたちを救ってくださる方だと。

わたしたちは、聖餐のパンとぶどう酒の中に、命を捨ててまで限りなくわたしたちを愛してくださるイエスを見ます。それを飲食することをおして、この方の愛の命をいただくのです。

聖別されたパンとぶどう酒は、イエスの愛のゆえにこの上なく尊く、また美しい光を放っています。

17. あなたのために与えられた主イエス・キリストの体 <陪餐>

用意が整い、わたしたちは主に招かれて食卓を囲みます。

あなたのために与えられた主イエス・キリストの体

アーメン

あなたのために流された主イエス・キリストの血

アーメン

主イエスが意志をもってご自身の命を与えてくださるのですから、わたしたちは「**アーメン**」と言ってしっかりと受けましょう。

聖餐のパンとぶどう酒をとおして、わたしたちは何を受けるのでしょうか。

- (1) **主イエスの命**を受けます。主の命がわたしたちの命となり、主の体と血がわたしたちの血肉となります。
- (2) **主イエスの愛**を受けます。主の愛が注がれて、わたしたちの内に浸透します。わたしたちのうちにある不安や葛藤は溶かされていきます。

(3) **主イエスの志**（祈り・願い）を受けます。愛と平和と正義が満ちる神の国が実現することを切望されるイエスの志を、わたしたちは受けるのです。

イエスは5つのパンと2匹の魚を祝福して、大勢の人を養われました（マルコ6:33-44）。その時、祝福するイエスにも、配る弟子たちにも、いただく群衆にも、大きな喜びがあったはずです。わたしたちも聖餐をいただき、分かち合う時、**大きな喜び**を与えられます。

聖餐を受けたあとの時間を大切にしましょう。イエスの愛の命が自分の心と体に浸透していくのを感じましょう。

こうしてわたしたちは力と慰めを受け、新しく出発するのです。

18. 神の恵みが、常に皆さんとともにあります ように <感謝・祝福・派遣>

陪餐の後、一同で**感謝**の祈りを献げます。神はみ子イエス・キリストの尊い体と血をもってわたしたちを養ってくださいました。

今、わたしたちの祈りの群れの中に、また一人ひとりのうちに、イエス・キリストの愛の命が宿っています。わたしたちの心臓は、喜びに鼓動するのです。

今やわたしたちは主イエスの愛の命を受け、主の願いを託されました。「**み国の世継ぎ**」として神の国の実現のために、わたしたちはこの祈りの場から世界に**派遣**されます。わたしたちにはこの世に生きる意味と、なすべき働きがあるのです。

「どうか、聖霊によってわたしたちをこの世に遣わし、み旨を行う者とならせてください。栄光は世々に限りなく、父と子と聖霊にありますように アーメン」

祈りは、三位一体の神への賛美で締めくくられます。

司祭（主教臨席のときは主教）は次の言葉で会衆を祝福します。

「父と子と聖霊なる全能の神の恵みが、常に皆さんとともにありますように」

ここで大切なことは、神がわたしたちを祝福してくださる、ということです。司祭は神の祝福を仲介する者です。

この時、十字架を切るのも良い習慣です。祝福をわが胸に刻みます。そして「**アーメン**」としっかり応答します。

祝福を受けたらここでしっかり立ち上がりましょう。神がわたしたちをこの世に派遣されます。決意してわたしたちは出発するのです。

執事または司祭 ハレルヤ、主とともに行きましょう
会衆 ハレルヤ、主のみ名によって アーメン

これは 2023 年 5 月から 2025 年 4 月にかけて上野聖ヨハネ教会で話したものをまとめたものです。

2025 年 6 月 1 日 復活後第 7 主日（昇天後主日）発行 井田 泉
